

第二回 美しい日本語で詩を読む会

朗読詩集

2017.10.1



青い海 中澤京華 3

偽物 小湖舎みなみ 4

夕焼け 小湖舎伸行 5

鈴蘭の花 村田辰夫 7

初恋 「アメジスト」 上村多恵子 9

初恋 加納由将 11

初恋 井上良子 13

通り雨 司由衣 14

初恋 下田喜久美 16

カンパリオレンジ 波野仁 24

初恋悲曲 すみくらまりこ 26

青い海

中澤 京華

思い出の扉
開けば
柔らかな
輝き放ち
蘇るひと

**

海辺で
波飛沫と 一緒に
きらめく
あなたの笑顔
優しい瞳

**

見つけた
淡い光を
閉じ込める
抱き締めるように
包み込む

**

さよならの
季節を越えて
かけがえのない
ひととなる
時の風

**

幼い時を
守ってくれた
兄のようなひと
心の中に広がる
青い海

(五行詩 組詩)

偽物

小湖舎　みなみ

笑うあなたの顔を小さく疑った

笑わないあいつをつまらないと思った

笑うあなたの顔が一瞬凍るのが好きだった

笑わないあいつの顔は冷たくて好きじゃなかった

笑うあなたの顔があざとくて好きだった

笑わないあいつの顔は単純で好きじゃなかった

笑うあなたの顔がやさしくて好きだった

笑わないあいつの顔は自分本位で好きじゃなかった

笑うあなたの陰がすきだった

笑わないあいつの影は薄かった

笑うあなたに自分の思いを重ねた

笑わないあいつが僕だった

夕焼け

小湖舎 伸行

実が熟れる瞬間なんて 掴みようがなかった

君が透明な宝石を生み出したから

他の色は意味を失ったんだ

君の心は音となり 僕の胸を何度も叩いた

舞台上上がることをためらう僕は、

焦がれる様を見せまいと顔を背けた。

幾つもの季節が覆い被さったとしても

あの日の夕焼けが沈むことはない

鈴蘭の花

村田辰夫

ああ いま 君がいてくれさえしたら

今世紀の初めにパリで流行した「ジュペキュロット」スカートが

どんな形をしていたかを 教えてくれるだろうに

わたしの専門は人体の曲線を測定して

身体にぴったりの紙型を作り出す技術理論にあるのだ

などと 主張したりはしないで

邪魔くさかっても 写真などを探して

見せてくれただろうに

もし 君がいてくれさえしたら

ああ いま 君がいてくれたら

戦後 ぎゅうぎゅう詰めの電車のなかで

つり革にぶら下がっているぼくに 黙って

鈴蘭の花を手わたし

自分は先に降りて 窓からその花を受け取った

あの鈴蘭の花は

その後 どこに生けられ どうなったのか

尋ねることもできただろうに

そしたら 君は いつものように

眉をよせ 控えめに微笑みかけるだろうに

もし 君が いま いてくれたら

もし 君が いま いてくれたら

穂高の見える河童橋の清流や

松本城の小ぶりの城郭や

知恩院楼門の太い柱の蔭でのことや

湖北の里の祠のことや

銀のスプーンの動かし方や

聞きたいこと 言いたいことがあるものを

君が いま いてくれさえしたら

君が いま いてくれさえしたら

君が いま いてくれさえしたら

こんな詩を書かずにすんだだろうに

それ誰のこと なんのこと と

詮索されずにすんだだろうに

いま 君が いてくれさえしたら

スカートの形のことと悩むこともなかっただろうに

君が いま いてくれさえしたら

初恋 アメジスト」

上村多恵子

未来がまだ

神秘的なまでも

憧れのなかに

満ちていたとき

ただ見つめ合った

恥じらうだけで

軋み合う

アメジストの光の屈折

ときめきと

素っけなさが

何も告げないまま

記憶の宝石箱に納められ

水の星の中で

薄く光を放つ

恋の奥深い焰は

まだ知らぬ

遠いピアニッシモ

青と紫の

マリアージュに溶けた

その透きとおった

アメジストの玉を

生涯忘れることはないだろう

雨の日に

加納由将

会いたいと思った

どこまでも続く長い坂道で

躓くほどに

急いで会いたいと思った

曇っている

空さえ晴れ渡るように

エネルギーを爆発させて

会いたいと思った

遠くで虹が一瞬崩れても

会いたい気持ちに変わりはなく

夕立ちのふりはじめを思い出す

濁いた瓦を染め抜いていく雨は

もう降らないでほしいと思った

降れば二人の間は

すこし遠のいてただ思ったんだ

話していたって

どうすればいいのかわからずに

冷たい雨は

ひたひたと

体の中にしみこんでくる

雨の日に遅刻してきた生徒のように

そこに座り込んでいる

初恋

井上良子

まぜてまぜて かきまぜる

このつかみようのない

あばら骨の向こう側

ちいさなといきばかりすつて

微熱のからだ つま先立つ

ゆびさきが ちきゅうから

はなれてういて

わたし そのうち われるから

われて ふきあれる

はじめての夏草のうえ

しずまない青い太陽おいかけて

通り雨

司由衣

ぽっかりと白い雲の橋

校庭に天使が降りてきた

Freeze 一瞬 目が眩み動けない

何か やさしい影に匿われていた

私は地の底に沈んでゆく

私はこのまま死んでゆく

不意に肩を叩かれ

驚いて薄目を開けると

長髪の似合う青年が微笑んでいた

そのひとの講義はわかりやすく

そのひとのパッションに引き込まれ

苦手な幾何学が優になった

放課後 通り雨の校庭を駆け抜けた

後ろから走ってきた そのひとは

私の襟に透明のビニールを結んで引き返した

長髪の襟足に雫たる

あの やさしい通り雨は

いつまでも 私の心を濡らした

そのひとが

おとなの女と行くのを見た

白い傘の女と行くのを見た

夏のおわり 私は再び入院した

そのひとは一度だけ見舞いに来て

病室の窓から七色の虹を眺めていた

私は ほかに何も望まなかった

初恋

下田喜久美

ふれないでください

ノックしないで

こころのドアに

早鐘を沈めるすべを 知りません

ふるえる小鳥を ゆりかごに憩わせるすべを

知りません

ゆっくり ゆっくり歩いてください

そうっと

そうっと

窓を開けてください

世界が赤く染められた この刻限に

ものみな 輝いて見える この刻限に

ふれないで

ノックしないで

どこからかやってきた 透明でつぶらな風

あなたの中にしばらく私を

預けたい

青い見知らぬ時間の中を

ただただようは

未知なる名前のない心

深いところで呼ばれたのですね

後先も知らないで

その優しさを感じていただけ

初恋のクレバス

下田喜久美

いつもリーダーで明るかったのですね

いつか私の悪い所を あなたは指摘した

中学校の ホームルームの時間

心の中に入ってきたのはあなたが初めてでした

何時だったかしら好きだといったのは私でした

卒業式も終わった日

あなたは急に私の家の前にたっていた

どうして

嫌いなはずだったのでしょうか

私は舞いながらきっと輝いていたと思います

父が急にそれを知って学業半ばである事

彼の家は肺結核の人が居る事を告げて

わたしをとがめたのです

それきり私は会わなかった

苦しくて

そんな私を父は映画に連れてゆき

進路は別れを示していた 通学の道で

ある日彼はパントマイムで私を罵倒して 去っていった

二十年もたって まだ独身の彼だった

めったに人と話さないのだと

余りにたわいない恋だったのに

私のためだとは思わない

彼は誰かと付き合ったらしい

しかしそのさきがなかったのだとも

何も伝えず何もはなさず

幼いと言ってもそこには しらないという名の

残酷な罪

人生のクレバスが

永遠に口を開けている

初恋

秋月夕香

星空に

遠くとんでいく旋律

あの人の吹いた 草笛は

崇高な純粹さを 呼びさまし

そのリズムは

宇宙に届く

野も山も

静かに眠って

聞き入っている

心の隅に

過去からの

贈り物をとじこめる

束の間の

しあわせを こわさないように

蕾のまま流れていく少女よ

長岡紀子

もう少し もう少しだけ待って

と 固い蕾はそっと囁く

まだ明けきらぬつーんと冷たい空気を

全てを生かす陽の光が

少しづつ 少しづつ

そっと優しく和らげ

諸手を差し伸べる

花は刻々と進む 時 に合わせて

かすかにその花茎を揺すらせ

五弁の花びらを 押し開く

乳房の蕾も開ききらず

川の流れのまま

流れていく少女よ

花開く時を夢見て

ほほえみを浮かべ

周りへのやさしい香りが

誰をも包み込み

喜びで満たせていたのに

密やかな逢瀬も記憶の中に閉じ込めて

少女は流れていく

カンパリオレンジ

波野 仁

裏返った記憶の果てに

饅えたピアノの音色が浮かぶ

遠い旋律に沈む横顔に問う

最初の夢

グラスにルージュを印す間の

逡巡

乾いた微笑 傾げた首筋

沈黙が浸透する

カンパリオレンジ包む指に

真夏の残り香

白い喉を過ぎる

甘美

悲哀

悔悟

半夏生の幻影が睫を掠め

放埒に交わした吐息の果ての

虚ろ

後れ毛に垣間見えた哀愁を

振り切るように

馴れた仕草で

最後のギムレットを

抱く

初恋悲曲 壺

もう

どこを探しても

あの時の二人はいない

もし

すれ違ったとしても

あの時の二人ではない

ほんの

ささやかな幸せを

分かち合っただけで

じつに

重い悲しみを

背負うこととなった

さやさや

笹が鳴っていた

実相院門跡で

そつと

御仏が二人の魂を

抱きとり給うた夜

もう

二人の影が

歩くこともなく―

ほら

いまでも 鈴虫が

悲しい曲を歌っている

初恋悲曲 弐

ただ

路上で影法師が

遊んでいた

ときに

地図の上で

隠れん坊をしていた

でも

影踏みは

決してしなかった

そう

悲しい曲を

離れて奏でていた

いつも

このピアノが歌い

そのチエロが泣いた

あの

六十分の楽曲を

名づけたらどうだろう

ただ

その奏者だけが

聴ける楽音

ほら

目を閉じて

旋律に身を任せよう

初恋悲曲 参

もう

葬った恋は

二度と甦らない

でも

歌の一節が

いつも胸に響いている

まるで

母の子守唄のように

わたしを眠らせる

だれも

哀れんでくれない

下手な初恋だった

そう

無言歌の「舟歌」が

ピアノの最後の声だった

もし

この歌がなければ

何があったというのか

そして

あなたはわたしに

何を残してくれたのか

ああ

何も分け合わず

そっと離れた二人だった

初恋悲曲 四

あの

偶然の再会に

驚いたわけでもはなく

わざと

明るく振舞ったのは

不自然だったかもしれない

でも

樹の幹を叩くように

問いかけてみたわたし

いつか

会えると思っていた

その言葉を聞いたとき

なぜか

わたしは心のなかで

本当の別れを告げた

すでに

新しい愛の樹が

育っていなければ

もし

孤独の砂漠を

彷徨っていたならば

きつと

想いがあふれて

何も言えなかっただろう

初恋悲曲 五

あの

偶然の再会は

やはり幻だったのだ

だれも

そこにはいなかった

なんのよすがもない

よし

だれかいたとしても

心を求め合うひとでなく

じっと

わたしの目を見て

心を砕くひとでなく

いつも

わたしを気遣い

庇護する人ではなかった

ああ

ただ悲しいだけの

むらさき色の宝珠が

この

わたしの言葉で

輝きを取り戻せるなら

ただ

絹布 きぬ) で磨いて

大切にしまっておこう

初恋悲曲 六

だれか

押し黙って

耐える少年を見たか

だれか

凍った顔の

虚ろな少女を見たか

でも

どんなことがあっても

生きなければならなかった

いつか

一途な少女は

沈着冷静な大人になると

きつと

無口な少年は

生真面目な大人になると

だれも

ふたりの明るい

未来を祝福することなく

もし

悲しみを垂れるとすれば

抜け殻のような人の歩み

ああ

無垢な魂を

闇に置き去りにしたこと

初恋悲曲 七

ときに

歳月は優しかった

つねに愛されていた

そして

夢と現を行き交う

人生もわたらしい

いや

果たせない願望など

捨て去ればよかったのだ

じつに

互いの約束も

契りもなかった初恋に

きつと

神様も哀れと

思し召された別離に

そつと

終止符を打てたら

忘れられたものを

でも

誰を恨むことなく

背負って生きた二人

さあ

あの世では話そう

心ゆくまで語りあおう

初恋悲曲 八

まだ

傷は治っていない

この辺が傷みにふれる

もう

クレーの日記を

読むことができない

もう

カンデインスキーの

絵も楽しめない

みな

あの出来事を

思い出させるから

ああ

美しい贈り物は

わたしの胸に守っている

じつに

褶曲 わゆうきよく) した

人生の断層をみれば

きつと

似た曲線をもつ

二つがこの世にあるはず

その

表土を暮しが覆っていく

重みが人を強くしていく